

【 研究ノート 】

近代化の歪みに挑んだ明治の女性たち¹⁾
津田梅子と石井筆子の異文化受容のパラドックス

清水孝子
(日本文理大学)

Women and Modernization in Meiji Japan:
A Study of Paradoxical Processes of Intercultural Adaptation
in Tsuda Umeko and Ishii Fudeko

SHIMIZU Takako
(Nippon Bunri University)

Abstract. The purpose of this paper is to examine, discuss, and illustrate two paradoxical processes of intercultural adaptation in Tsuda Umeko and Ishii Fudeko in the context of modernization in Meiji Japan. In the Meiji period (1868-1912), these two Japanese women experienced Western life. Tsuda Umeko (1864-1929) went to the U.S. when she was seven years old as part of a Meiji government mission from 1871 to 1882. When she came back to Japan after an eleven-year stay, she established the Women's English College in 1900, as the first private women's school offering higher education in Japan. In 1880 Ishii (Watanabe & Ogashima) Fudeko (1861-1944) was sent to France and Holland when she was nineteen years old under the order of Empress Shōken. After marrying with Ishii Ryoichi (1867-1937) in 1903, she devoted herself to mentally-handicapped children's education. First, I will introduce Tsuda's letters written to Mrs. Lanman between 1882-1883, which focus on her paradoxical attitudes towards the foreign missionaries' attitudes in Japan and Korean people's behaviors. Although Tsuda complains that missionaries look down on the Japanese way of life, her conceptualization of the Korean way of life is almost identical to the missionary critique. Next, I will introduce Ishii's speech notes after representing Japan at the 1898 Convention of the General Federation of Women's Clubs in Denver, Colorado in the U.S., which focus on her personal account of the immigrants to the U.S. Although Fudeko cares for the mentally-handicapped children excluded from the dominant culture in Meiji Japan, she stresses that the immigrants should be assimilated into the dominant culture in the U.S. Despite Tsuda and Ishii's considerable devotion and achievements to develop both women and

mentally-handicapped children, who were ignored by the government, both are alike in the contradiction in their processes of intercultural adaptation.

0 . はじめに

最初に、清水（2004、2005）に基づいて2人の生涯を簡単に紹介する。明治初期の日本で、西欧の生活を体験した2人の女性、津田梅子（1864-1929）と石井筆子（1861-1944）。津田梅子は1871（明治4）年、7歳で、岩倉具視を全権大使とする欧米視察団²⁾に参加し、11年間を米国で過ごした。梅子は1900（明治33）年に津田塾大学を創設、女子教育に貢献した人として知られている。一方、石井（旧姓渡辺）筆子は、1880（明治13）年、皇后の命を受けて、19歳でフランス・オランダに留学している。オランダ駐在特命全権公使長岡護美・知久子夫妻の従者の立場で同行したといわれている。詳細はわかっていないが、フランスでは組織的な慈善活動を見てきたという。筆子は、その生涯において、渡辺、小鹿島、渡辺、石井と4回姓を変えているが、1903（明治36）年、日本で最初の民間知的障害児の教育に取り組んだ石井亮一（1867-1937）³⁾と再婚後は、知的障害児施設「滝乃川学園」⁴⁾に住み込み、約42年間を知的障害児教育に献身した人である。

2人は、帰国後、1885（明治18）年に開校した「華族女学校」（学習院女子部の前身）⁵⁾で共に教鞭をとり、1898（明治31）年、共にコロラド州デンバーで開かれた「万国婦人倶楽部大会」⁶⁾に日本代表として参加している。梅子は米国滞在後、英国で女子教育を視察、筆子は知的障害児の教育を視察し、帰国後はそれぞれの道を歩く。欧米志向の明治政府の「近代化プロジェクト」の一環として、「官」の立場で海外生活を体験した2人であったが、結果的には、「民」の立場で、「近代化」という視野には含まれていなかった、女性たちや知的障害児の発展に献身することになる。

本研究の目的、方法としては、2人が書いた書簡や演説原稿という言説を通して、2人が異文化をどのように受容していったかを、解釈し説明するという個人史的アプローチをとりながら、明治の「近代化」という文脈の中で、日本と米国の関係に生きた、異文化体験の先駆者である津田梅子と石井筆子、2人の帰国直後の異文化受容のパラドックスを検証していく。

1 . 「近代化」について

津田梅子と石井筆子の2人の異文化受容を検証する前に、2人の背景となる「近代日本」が何を目指していたのかを検証しておく必要がある。

まず、「近代化」の概念について高畠の定義を紹介する。高畠（1998）によると、元来、「近代化」という言葉は、伝統社会や封建社会などの前近代社会から近代社会への移行やそれに伴う社会・文化諸領域での変化を指し示す形容詞として古くから使用されてきた中立的な概念であった。その後“西欧の衝撃”の下、「上からの近代化」を強いられた諸国では、「近代化」は中立的な概念というよりもむしろ独特の意味を内包するようになり、西欧近代諸国をモデルとして、その政治・経済・軍事・文化の体制を意図的に取り入れて自国の発展をはかることを一般に意味するようになったと説明している。

まさに、明治日本の「近代化」の目標も、まず何よりも西洋の文明を積極的にとり入れることであった。そして、「上からの近代化」の最終目標は、西欧諸国の圧力をはね返すことができるよ

うに「富国強兵」をはかることにあった。その結果、明治日本の大急ぎの「近代化」は「外形的近代化」にとどまり、「内面的近代化」はおろそかにされてきたともいえる。

梅子と筆子が、同時期に共に教鞭をとった「華族女学校」がまさにその「近代日本」を象徴する場所であったことは皮肉ともいえる。なぜなら、表向き「女性教育の発展」のため、当時の日本の官僚エリート層の男性中心の国家理念や教育理念の下で作られた「華族女学校」の目的は、「富国強兵」を支えるために「良妻賢母」を育てる以外の何ものでもなかった。「女子教育」という「外形的近代化」制度の導入はあっても、その実態は、欧米生活を体験した梅子と筆子の「女性の自立」や「女性の発展」を目指した「内面的近代化」とは完全に異なるものであった。梅子と筆子の異文化受容のプロセスは、まさにこの明治初期のねじれた「近代化」を抜きに語ることはできないである。

2．津田梅子と異文化受容

7歳から11年間を津田梅子は、持ち前の素質と勤勉さ、使命感によって、日常会話のみならず、抽象的概念を駆使して深い思索を進めるコミュニケーション能力を身につけていったが、その背後には、母語である日本語を失うという大きな代償を払ったのである。18歳で日本に帰国した梅子にとっては、本当の意味での「異文化」はまさに「日本」であり、1人の日本人として再生するという、「日本文化の受容」が彼女の「異文化受容」の課題でもあった。その梅子の異文化受容のプロセスを考える上で、1984年に津田塾大学本館の屋根裏で偶然発見された、米国留学時のホームステイ先のアデライン・ランマン（Adeline Lanman 1826-1914）との間で1882（明治15）年から1911（明治44）年までに交わされた450通ほどの書簡⁷⁾は、帰国後の梅子がどのように日本と向き合っていたかを教えてくれる貴重な資料となっている。特に帰国後の1年間の手紙が量的にも最も多く、梅子の逆カルチャーショックがいかに大きいものであったかが、彼女の手紙を通して理解できる。

2.1.1節と2.1.2節の梅子の手紙は、この時点で、梅子自身のアイデンティティに「揺れ」がみられることを証明してくれる。最初に引用する日本社会での女性についての手紙の中で、日本女性である梅子自身が、困難な状況におかれた日本女性たちを何度も「あなたたち」と呼び、日本女性を「他者」と捉えていることがわかる。また米国で見聞きした日本女性の情報をもとに、米国中産階級の人々と同じ視点から日本女性たちを語る梅子に、異文化受容のパラドックスを見ることができる。次の梅子の手紙は、クリスチャンである梅子のキリスト教宣教師に対する批判が書かれてある。米国人宣教師が日本人を見下すことに憤慨する梅子が、非西洋人である朝鮮人に対して見下すような口調で語るところに、梅子自身の異文化受容のパラドックスを垣間見ることができるのである。

2.1. 日本社会での女性の地位について

帰国直後の梅子の手紙によると、梅子が日本で再び適応していくための最も大きな障害の1つは、日本社会での女性の地位の問題であったと思われる。

2.1.1. 1882（明治15）年12月7日の手紙

...Oh, women have the hardest part of life to bear in more ways than one. Even in

America I often wished I were a man. Oh, how much more so in Japan! Poor, poor women, how I long to do something to better your position! Yet why should I, when they are so well-satisfied, and do not seem to know any better? (Furuki, Althaus, Hirata, Ichimata, Iino, Iwahara, and Ueda, 1991, p. 23)

梅子の手紙にある、「かわいそうで気の毒な女性たちに何かしてあげたい。あなたたちの地位を向上させるために」というレトリックに、梅子自身を含む「われわれの」という表現は含まれていない。同胞に対して「他者」と意識する梅子がそこにある。「梅子のこの語りから無意識のうちに、日米文化のはざまの中で、自らを特権的な地位においていたとも読み取ることができる」⁸⁾と高橋(2002)は指摘している。

2 . 1 . 2 . 1882 (明治 15) 年 12 月 28 日の手紙

...Strange truly, and though I often long to see you all again and be back in America, I would not have anything different, for I feel I must be of use, not because I know much, but because I am a *Japanese* woman with an *education*. Truly, there is much to be done for the women of Japan. (Furuki et al., 1991, p. 29)

一方、12月28日の手紙では、「米国は恋しいけど、私は教育を受けた日本女性であり、日本の女性のためにしなければならないことがたくさんある」と「日本女性」としてのアイデンティティや使命感を自覚しようとする梅子がそこにある。無意識に米国を優位におく梅子的心情(12月7日)と、官費で米国留学を体験した梅子の義務は日本の女性の地位向上のために働くことだという日本への帰属意識(12月28日)に、自文化でありかつ異文化でもある「日本文化」受容プロセスにおける梅子の心の「揺れ」を発見できる。

2 . 2 . 外国人へのまなざし

梅子の日本での再適応の2つ目の問題は宗教の問題であった。梅子は米国滞在中、日本のキリスト教解禁とともに洗礼を受け、敬虔なピューリタンとなって帰国している。しかしながら、その梅子が日本で、言語と文化、宗教を共有できる米国人宣教師たちに対しては、帰国直後から批判的な語り口である。

2 . 2 . 1 . 1883 (明治 16) 年 3 月 18 日の手紙

One thing, when I see or talk to the missionaries and foreigners in general, but Americans in particular, is their excessive narrow-mindedness, and their want of appreciation of anything whatever good in Japan or anywhere outside of America and American ways. I like America, but I must allow *at least* a few things superior in Japan, and I am sure, one who had seen neither one country or the other, and who could be an impartial judge, would be in favor of one as much as the other. ... And yet all the foreigners like nothing Japanese, and think American *everything* is unsurpassable. They truly look down on us, and it makes me very furious.... (Furuki et al., 1991, p. 51)

「彼らは日本のものは何でも嫌いです。日本人を見下しています」というように、米国人宣教師たちの白人文化中心主義的な態度と日本人を「他者」として捉える視座に悩み、憤慨し、アデアイン・ランマンへ、その憤りを伝える手紙を何度も梅子は書いている。

2.2.2. 1883(明治16)年9月30日の手紙

父が帰ってきました。2、3日前に、思ったよりも早く着いたのです。朝鮮についてとても興味深くおもしろい話をしてくれました。いくつかの点では、動物の方がこのような汚い朝鮮人よりましだと思いますし、あるところには本当に野蛮な人びとがいるのです。彼らは衣服や食料はとてもよいのですが、粗末に不潔につくられているのです。家は掘っ立て小屋のようだし、妻たちは完全に奴隷か囚人のようです。寝食や労働のために一つの部屋からでることもせず、下層階級の人びとだけが日中、日光にあたるくらいのもので、...彼らの習慣は下劣で、何もかもが汚くそして粗野なのです。...父が私に朝鮮について多くのことを話してくれました。あなたの記事のために、聞いたことを書いてまとめたいと思います。きっと、とても関心をもたれると思いますので、書いたら送ります。ある意味で、世界で最悪の国のように思われます。日本で出会った朝鮮の人たちは、人間的にも精神的にも日本人の特徴ととても似ていて、善良で知的で頑強な男性に思われたのですが、どうして人間がそのようになれるのが驚きです。(高橋、2002、pp. 188-189)

一方、梅子の父・仙の朝鮮訪問から見聞きした朝鮮人に対する描写から、米国人宣教師が日本人を見下すのと同じ視座で、朝鮮人を見下す梅子の視座が見られる。米国人宣教師が日本人を侮辱的に「他者」として捉えていたことに憤慨していた梅子自身が、朝鮮の人々について、自文化中心的な態度をとっているということになる。

2.3. 梅子の米国留学の背景

梅子の帰国後に経験した、日本文化を受容していく過程における、逆カルチャーショック時期に見られる梅子の「揺らぎ」や「自己矛盾」の背景として、梅子の米国留学の背景を見ておく必要があるだろう。

1つは、梅子の11年間の留学が、「近代化」を目指した明治政府による官費留学であったということだ。日本の「国民国家」建設のための「近代化プロジェクト」に組み込まれた留学であった。しかし、表向きは西欧に対するイメージ戦略として女子教育を推し進めるふりをしながら、本音のところでは、「富国強兵」を目指した「文明開化」の中で、よい母親を創るために米国へ女子留学生を派遣したのである。つまり、梅子たちは、女性の社会的地位の向上や権利を得るために、米国へ送られて来たのではなかった。その枠組みの中で、政府の思惑を越えて「女性の権利」というものに目覚めた梅子は、あまりにひどい日本の女性たちの状況の中にとまどったことであろうと想像される。とまどいながらも、そのような日本女性のために何とかしなくてはならないという使命感・焦りがあったと思われる。

もう1つは、梅子が米国で過ごしたランマン家の「白人中産階級中心の教育観、黒人や労働者を排除した文明観」に影響を受けていたという背景が考えられる。梅子が11年間を過ごすことになったランマン家のチャールズ・ランマン(Charles Lanman 1819-1895)は、岩倉使節団の女

子留学生派遣の受け入れに協力した米国弁務公使、森有礼（1847-1889）に影響を与えた人物である。チャールズ・ランマンが説く女子教育の対象は、白人の中産階級以上に属する女性であると、高橋（2002）は指摘する⁹⁾。つまり、米国先住民や少数民族、労働者階級などを排除した女性たちであった。そのような「階級」・「人種」に対するに序列の構造を無意識のうちにも、梅子は身につけていったのではないだろうか。

3 . 石井筆子の異文化受容

1861（文久1）年に長崎に近い大村で生まれた筆子は、維新後に東京で高級官僚となった父の渡辺清とともに11歳の時に上京する。1873（明治6）年、当時の唯一の女子高等教育であった東京女学校（竹橋女学校）に入学、午前中は英語での授業が行われたという。その年の9月に父は福岡県令（県知事）に任ぜられたが、学業優先という理由で、筆子は東京に残り、勝海舟の屋敷内で、商法講習所（一橋大学の前身）教授ホイットニーの娘クララと出会い、キリスト教と出会うのである。筆子はこの頃より外国へ行くことを希望していたという。1880（明治13）年、19歳の時、筆子は皇后の命を受けて、オランダ駐在特命全権公使長岡護美・知久子夫妻の従者の立場で、フランス・オランダを訪問する。19歳という年齢で、すでに英語でコミュニケーションをとることが出来、社会のことも理解できた筆子の2年間のヨーロッパ滞在についての詳細はわからない。1882（明治15）年に帰国した筆子は、母の死亡、父の再婚、ヨーロッパでの見聞を通して、教育による女性の向上と社会の改善こそが日本にとっては必要だという認識を持つようになる。その後、クララとの交友も再開し、クララとの交友を通して、米国での11年間の留学を終えた津田梅子や山川捨松と合流する。その頃、筆子はお雇い外国人で「日本近代法の父」と呼ばれる法学者ポアソナードの娘ルイズからフランス語を学び、ポアソナードから、「自然法思想」や「人権思想」についての考え方を教授されたようである。表面的な文明開化ではなく、その制度や思想なりの背景となる精神を学ぶことの重要性を学んだともいわれている。1884（明治17）年、小鹿島果と結婚するが、1885（明治18）年、英語講師の津田梅子と共に、フランス語の囑託講師として華族女学校で教鞭をとる。1886（明治19）年に津田梅子立会いのもとで受洗、虚弱児の母として孤児救済の仕事も続ける。

夫・小鹿島果を亡くした後、1898（明治31）年6月、37歳の筆子は、日本代表として津田梅子とともに「万国婦人倶楽部大会」出席のために米国へ派遣される。米国訪問については、筆子は長い間沈黙を守っていたが、『過ぎにし日の旅行日記 明治31年米国に使せし折の顛末』（1942（昭和17）年刊行）の中で、「万国婦人倶楽部大会」のために渡米した時の報告を書いている。

次に紹介する引用は、前著の巻末付録として掲載された、帰国直後の1899（明治32）年5月20日に、当時の華族女学校幼稚園講堂において開かれた、「大日本婦人教育会当集会」での視察報告の講演ノートの一部である。ここで紹介する引用により、帰国後の筆子がどのように異文化「米国」に向き合っていたのかがよくわかる。社会的弱者である知的障害児などの発展を目指そうとした社会事業に関心をいただいていた筆子であったが、米国の移民や少数民族に対しては、「同化」を強要するといった立場をとっているところに、彼女の異文化受容のパラドックスを発見できるのである。

3.1. 筆子の米国訪問

時の文部大臣の要請で、米国デンバー市で開催される「婦人倶楽部総連合年次大会」に参加したのだが、3ヶ月前に7歳の3女・康子を亡くした筆子は渡米する心境ではなかったという。渡米を決意した背景には、憔悴しきった筆子の気分転換の必要性を感じた叔父・昇の勧めがあった。津曲（2001）は、「筆子らの出張名目は万国婦人倶楽部大会出席であるが、実質は私費による米国の女子高等教育事情調査であった。…加えて、聖公会の信徒である筆子と梅子には、1898（明治31）年10月に首都ワシントンで開かれる米国聖公会婦人補助会大会へ出席するという、非公式の目的があった」（p. 23）という。その旅行の途中、筆子を信仰に導いた、日本で親交のあったブランシェー師と再会し、石井亮一と落ち合うのである。ここで、筆子は石井亮一との結婚を決意する。そのことは、孤児を含む女子教育を筆子が、知的障害児教育を亮一が受け持つという共同事業を2人であることを意味するのである。会議の出席後、英国からの招待を受けていたが、表向きは健康上の理由で断り、津田梅子のみが英国の教育視察に行き、筆子は米国に残り、各地の先進的な知的障害児学校や社会福祉施設を見学する。

3.1.1. 多民族国家米国について

筆子の1889年の米国の多民族国家米国の実態を述べながらも、その多民族国家のマネジメントの困難さを指摘している。特に興味深いのは「質の悪いならず者を受け入れることの難しさ」を強調しているところである。

而してその大増加中、この大国の主動者にして建設者たる、アングロサクソン人種や、フランス人の子孫は比較的少数で、あるいはドイツ、あるいはイタリア、あるいはオランダなどの国々から入込んだ者や、ユダヤ人の子孫が多い上に、年々歳々新しく移住し来る者がまたおびただしいとの事でございます。

而してこれ欧州人種の外に、アメリカンインディアンと称ふる、土着の人種と奴隷として初め買ひ込まれたアフリカ人の子孫も大変に多いので実に種々雑多、ありとあらゆる世界の人種が寄り合って成立って居る如何にも珍しい国柄でございます。

又これらの新しく他国から移住する者は大概自分の国で困りはて、「米国へ行って、一働き」と云った様な労働者や、もっともっと質の悪いならず者が入り来るそうでございます。

「このように世界の屑みた様なものまでも負ひ込んで、どうしてよなげるのだらう、而して『我は米国人なり』との、誇の種をどうして蒔き、夫をどうして涵養する事が出来るのだらう」と実に不思議に思ひました。（石井、1942、p. 78）

上記の引用の多民族国家米国についての語り口の中に、確かに、筆子の「人種」・「階級」・「国籍」へのまなざしが発見できる。特に、移住者を周縁に位置づけ、「このように世界の屑見た様なもの」と言い切る筆子の視座は、まさに白人中産階級以上の視線と同じものがあり、津田梅子が朝鮮人に抱いた侮辱のまなざしと共通するものが感じられる。人間はそれぞれ異なっていると考える前に、民族・国籍でひとくくりにしてしまう所に、2人の限界が感じられるのである。

3.1.2. 米国の教育について

筆子は、米国の女子教育についての「進歩」を、米国・英国・日本という序列の中で捉えてい

る。「西洋」を「進んだ」ものとして、また「日本」などを「遅れた」ものとして価値づける筆子の引用を紹介する。

米国の女子教育の状を視察に来た英国婦人の言に、「米国女子教育の進歩は驚愕の外はない、どうしてそこまでの進歩が為し得らるるのであらうか、惟ふに米国は、ヨーロッパと違って、古い習慣や風俗などに束縛さるるやうな事がないため、何事にも実地実用を重んじて着々実行し得らるるからである。ヨーロッパでは最も高い理想として手をつけ得ざる所をも、米国では何の苦もなく実現せらるるのみか、またそれを基礎として先へ先へと進み行くのである。又児童研究に力をつくしてあるのは敬服の至りである。実にこれは社会万般の土台であるからこの研究が益々進歩して行くなれば、今後どこ迄この国は発展するか量り知られない、実に驚嘆すべき国である」と。

欧州各国何れも、長短はございますが、女子の権利や、教育などに最も重きを置いてある英国婦人の眼にさへ斯く映じて居りますから、後進国の我が日本、殊に女子に就いては儒教や仏法の見地から下された断定に因て、根本思想の異なっている東洋人の眼には、不可解と申す外はございますまい。(石井、1942、pp. 85-86)

米国の女子教育についての語り口に欧米優位の思想が感じられるが、米国でも、女性たちには教育や政治参加の制限が加えられていたはずであり、その「負」の側面については全く言及されず、「儒教や仏法の見地から下された断定に因て、根本思想の異なっている東洋人」というように、西欧と東洋を区別しながらも、そこに西欧の「正」の面だけを見た筆子の西欧と東洋の比較には、西欧を理想化しすぎているようにも思われる。

3. 1. 3. 米国の精神と帝国主義の矛盾

筆子は、米西戦争などにみられる米国帝国主義が米国の建国の精神(「すべての人間は平等につくられている」)に反することに警告を発しながらも、ヨーロッパからの移民たちが「同化」されないことを、次のように嘆いている。

併しここに米国の為にまことに恐ろしい事がございます。それはこの富源をめあてに欧州あたりから入込む移住民の余り多い事でございます。多過ぎる為に真の米国魂に同化されない事でございます。因て私は誰しも驚嘆する米国の富だけには心が動かされません、敬服するのは建国の精神でございます。

この建国の精神が頭をあげて全国民の主動となって居るならば、世界人道の上にもどれほどの光明を放つかしれません。スペイン戦争の影響かして、帝国主義など申す事がちらほら聞えて居ましたが、夫は米国建設の精神に反く事であると感じました。

我が日本がどこどこまでも万世一系の貴い国体を保って行く事が美しいやうに、米国はどこどこまでもその立国の主義を保つべきだと思ひました。(石井、1942、pp. 88-89)

この引用から、米国建国の精神である「すべての人間は平等につくられている」という文言に、「女性・黒人・米国先住民は含まれていない」ということを、筆子自身認識していなかったことがわかる。それ故、「真の米国魂に同化されない」移住民に対しての口調は容赦なく、移住民への視座は白人の中産階級以上の人々の視座と全く同じである。また多民族国家米国のあり様を見学

し、さらに、社会福祉の組織的取り組みを体験した筆子であっても、「日本がどこどこまで万世一系の貴い国体を保って行く事が美しい」という語り口にもみられるように、「人種」・「民族」・「階級」のヒエラルキーを超えることができなかったのではないだろうか。

3.2. 筆子の背景

石井筆子は、ボアソナードから「人間を向上させるものは教育であり、労働者も教育を受ける権利を持つ」というように「人権思想」や「社会福祉思想」についての考え方を教授されたといわれている。また彼女自身、前夫との間にできた3人の子どもに障害があり、「弱者」の立場から世の中を見ていたという状況であったにもかかわらず、他の「人種」・「民族」・「階級」に対しては「上」から見ている筆子自身にも、梅子と同様、自己矛盾（パラドックス）を内包していたともいえる。

米国社会が米国の移民を「遅れたもの」として捉えた視座そのままに、筆子が米国の移民を見ているプロセスは、「西欧」を「進んだもの」として捉え、「日本」や「非西欧」を「遅れたもの」として捉えるプロセスに通じるものがある。「西欧化＝近代化」と捉えた「近代日本」の時代に、「西欧」を体験した筆子にとっては、「西欧」の優越性という拘束から超えることは、困難なことであったと想像できる。

4. おわりに

津田梅子と石井筆子の異文化受容のプロセスを考える時、明治の日本の同時期に異文化を体験した2人に、共通の異文化受容のパラドックスが見られることは興味深い。そのパラドックスの構造も二重・多層の構造になっているのが特徴だ。1つは、女性の権利や社会福祉を広めようとした「開かれた受容」の側面もあると同時に、日本人としての「伝統保持」という側面があった。もう1つは、その「伝統保持」自体にパラドックスが見られた。自らは、日本人としてのアイデンティティというものを保持しながら、中産階級以上の西欧人以外の他者、つまり他の「人種」・「民族」・「階級」に対しては、「同化」を強要したり、排他的な態度をとったりというように、「同化による閉鎖性」いいかえるなら「閉ざされた受容」の側面も内包していた。

津田梅子と石井筆子の2人の女性たちが、明治の「近代化」の中に生きて女子教育・障害者の教育に貢献したという意味で、「近代化」の歪みに挑み「近代化」を拓いた人物であるということは特筆に価するが、同時に、帰国直後の2人にとって「西欧文明」を優越した視点で捉えるという意味では、「近代化」の発想を超えられなかったともいえる。

ところで、米国視察後の梅子と筆子は、共に華族女学校を退職し、梅子は1900（明治33）年に「女子英学塾」を創設した。その後、梅子の認識に変化があったのかどうかまだわからない。今後の研究課題としたい。筆子についても、石井亮一と再婚した1903（明治36）年以降、亮一の設立した「滝乃川学園」の知的障害児教育事業に携わってからの筆子の認識の変化については、今後の研究課題としたい。筆者は、すでに拙論（清水、2004、p.122）で、「自らの体験、つまり、女性が道具のように結婚させられる状況、また障害児を抱えたことにより、女性の自立と障害児教育の必要性を肌で感じていた筆子は、そのような人たちを自分の中にとりこみ、対話し、関わっていきながら生きていくという選択をした」と語った。その後、施設内の貧しい女兒の教育に専念し、彼女たちの自立の場をつくるために障害者福祉の専門職（保母）養成事業に専念するな

どして、物質的發展を目標にする日本の「近代化」の中で取り残された、貧しい女兒や障害者の視点からの人間的成長（発展）へと向かった。おそらく、米国訪問時の筆子の認識に変化があったことは想像できる。

異文化への向き合い方に、矛盾する2つの特徴、「開かれた受容性」と「同化による閉鎖性」があると指摘したのは、青木（1988）¹⁰である。「文化受容のプロセスが内包するパラドックス（開かれた部分と閉ざされた部分）」を検証することは、過去の問題として終わるのではなく、今日に生きる私たちが抱える「異文化受容」のパラドックスを相対化する視点を与えてくれる。さらに、そのパラドックスを超える生き方を追求することこそ、「異なるもの」を「同化」という形で「消化」するのではなく、鶴見も問いかけているように、「異なるものが異なるままに共生するにはどうしたらよいか」¹¹という「新しい論理」への道を見出すことに通ずると思われる（多田、鶴見、2003）。

本稿は、明治の2人の日本人女性、津田梅子と石井筆子の異文化体験を過去の問題として分析することで終わってしまったが、今後は、この「研究ノート」を足がかりに、津田梅子と石井筆子の異文化体験を、現代日本人の異文化に接する態度との関係で考察していくといった「今日的意義」について発展させるような研究へと議論を深めていきたいと思う。

註

- 1) 本稿は、日本コミュニケーション学会九州支部第12回大会（2006年10月9日、大分国際交流会館）で口頭発表したものに加筆したものである。2人の査読の先生方及び編集委員の吉武正樹先生には、本稿を丁寧に読んで頂き、貴重なご意見を頂戴した。先生方の適切なご指摘に対し、心からお礼を申し上げたい。
- 2) 1871（明治4）年11月12日、横浜から欧米各国に使節団を送り出す「アメリカ号」が米国へ向けて出航した。そのメンバーは特命全權大使・岩倉具視をはじめ総勢107名といわれている。使節団の最大の目的は、近代国家の制度・文物の調査、研究であった。1年10ヶ月の間、米国、ヨーロッパ諸国、アジア諸国を周り、1872（明治5）年9月13日に横浜にもどった。この船上の中に、北海道開拓使が募集した5名的女子留學生がいた。その1人が7歳に満たない津田梅子であった。清水（2005、pp. 21-22）からの引用。
- 3) 石井亮一は1867（慶応3）年佐賀県に生まれる。立教大学在学中に洗礼を受ける。大学卒業後、立教女学校教頭となる。1891（明治24）年10月濃尾大地震の時、学校を辞し、東京神田西黒門町に孤児教育施設を開設。収容児童20余名のうちに、知的障害児を見出し、2度の渡米で、知的障害児教育を学び「滝乃川学園」を設立する。なお、注3）から6）については、清水（2004、pp.124-131）からの引用。
- 4) 1892（明治24）年、前出の孤児教育施設を、東京都滝野川に移転。1903（明治36）年、筆子と結婚後は、西巢鴨に移転。1920（大正9）年3月、園児の過失で全焼。1928（昭和3）年、国立市谷保に新築移転。1937（昭和12）年の亮一の死後、筆子が2代目学園長を勤める。筆子の死後、学園は社会福祉法人となり、重度知的障害児施設に指定され、現在は、児童部の定員70名、成人部の定員60名を受け入れている。
- 5) 1877（明治10）年、皇族と華族の子弟の教育のために学習院が設立され、1885（明治18）年、学習院女子部が華族女学校として分離独立。校長は谷干城陸軍中将だったが、実際の学校運営は、幹事兼教師の下田歌子が行っていた。津田梅子と石井（小鹿島）筆子は創立当初から教師として参加。1906（明治39）年、女子学院と改称。第二次世界大戦後は学習院と合体し、文部省管轄の私立学校となった。
- 6) 1898（明治31）年5月、米国の婦人同盟倶楽部副会長アリス・ブリード夫人が来日し、同年6月、デンバー市で開かれる「万国婦人倶楽部大会」に日本からも代表を派遣するよう、副総理の大隈重信に要請。総理伊藤博文と相談して、文部大臣に人選を依頼。津田梅子と石井筆子が選ばれた。同年6月3日出発。梅子と筆子たちは3000人の聴衆の前に英語でスピーチを行った。
- 7) 梅子とアデリンとの書簡は *The Attic Letters: Umeko Tsuda's Correspondence to Her American Mother*, edited by Yoshiko Furuki et al. (New York: Weatherhill, 1991) として出版されている。但し全書簡は含まれていない。
- 8) 高橋（2002）第5章「ペーコン家の娘たちと津田梅子の絆」pp. 111-112 参照。
- 9) 高橋（2002）第2章「駐米時代における森有礼と女子教育観」pp. 44-46 参照。
- 10) 青木保『文化の否定性』（1988）pp. 130-137 参照。
- 11) 多田、鶴見（2003）「異なるものが異なるままに 多田富雄さんへ」（2002・7・7）（鶴見和子）pp.111-113 参照。

引用文献

- 青木保（1988）『文化の否定性』中央公論社。
- 石井筆子（1942）『過ぎにし日の旅行日記 明治31年米国に使せし折の顛末』滝乃川学園。
- 清水孝子（2004）「石井筆子と異文化受容 内発的発展への道」『日本文理大学商経学会誌』第23巻第1号、105-133。
- 清水孝子（2005）「岩倉使節団と女子留学生 近代化を問う」『日本文理大学商経学会誌』第24巻第1号、19-43。
- 高橋裕子（2002）『津田梅子の社会史』玉川大学出版会。
- 高畠通敏（1998）「近代化」『世界大百科事典（第二版）』[コンピューター・ソフトウェア]日立デジタル平凡社。
- 多田富雄、鶴見和子（2003）『邂逅』藤原書店。
- 田中彰（1994）『岩倉使節団「米欧回覧実記」』岩波書店。
- 津曲裕次（2001）『シリーズ福祉に生きる49石井筆子』大空社。
- Furuki, Y., Althaus, M., Hirata, Y., Ichimata, T., Iino, M., Iwahara, A., & Ueda, A. (Eds.) (1991). *The attic letters: Ume Tsuda's correspondence to her American mother*. New York: Weatherhill.